

保育者養成における「折り紙」指導の必要性についての一考察 —実習時における経験に関する学生アンケート調査を基にして—

梨 本 竜 子

A study on the need for "origami" instructions in training childcare providers.
- Based on questionnaire surveys given to students in relation to their experiences upon training -

Ryuko Nashimoto

1 はじめに

折り紙は、我が国の幼児教育の初めから保育内容に取り入れられてきた活動、遊びである。明治9（1876）年、日本初の公立幼稚園として東京女子師範学校附属幼稚園が開設された当時の保育内容は、フレーベルの教育原理の影響を色濃く受けたものであった。その際、フレーベルの「恩物」のひとつ「手技」として、ヨーロッパにおける伝承折り紙であるFalten、訳して摺紙（しょうし）が保育内容に導入されたのである。そしてそれが、日本の保姆達によって、古来からあった日本の伝承折り紙である「折形」や「折据（おりすえ）」と融合していったものである。明治期に設立された他の日本の幼稚園の保育内容は、東京女子師範学校附属幼稚園を模範としており、摺紙は全国に広がっていった。その後、大正時代の自由を尊重する教育の時代になって、折り紙は子どもの創造性を育てないとの説が流布するようになった。戦後の教育界でも、影響の強かったアメリカが折り紙を教材にしていなかったこともあり、模倣性の強いものとして教育、保育内容から排除されていった時期もあった。しかし、現在なお折り紙は、多くの幼稚園、保育園で日常的に行われている活動である。

折り紙が保育内容としてこれまで取り入れられ続けているのは、その教育的価値が高く認められているためと推察される。しかし、幼稚園教諭、保育士といった保育者の養成課程においては、幼児の折り紙遊びについて、特に取り上げて指導することが必須とはされていない。筆者は、在籍する幼児教育学科の学生から、実習で幼児に折り紙を教えることの難しさについて相談を受けた。また、学生自身が幼稚園児だった頃に、「一斉指導で上手くできず、それ以来折り紙に苦手意識を持ち続けている」との話を聞き、保育者の指導の影響の大きさを感じた。

折り紙はいうまでもなく遊びの一つであり、幼児自身が自発的に本や折り図を見ながら折ることや、幼児同士で伝え合うことも当然ながら多々あると考えられる。だが、同様に保育者が幼児に指導する場面も多い活動である。幼稚園での教育実習や保育所での保育実習において、実習生が幼児に折り方を教えてくれるよう頼まれたり、部分実習の主活動として取り上げたりする機会もある。そのため、保育者となる学生自身が折り紙の経験を積むことで、折り図の見方や折ることに慣れ、幼児の発達や興味関心に合った様々な作品を知ることは無論必要である。しかし、それだけでは、幼児への指導法についての

理解は十分とはいえないのではないだろうか。

本論文では、保育者養成課程における折り紙指導の必要性とそのあり方について、折り紙の教育的価値と指導法に関する先行研究と、学生の実習時における経験についてのアンケート調査を基に考察する。

2 折り紙の教育的価値とその指導法について

(1) フレーベルの折り紙における教育的価値

幼稚園の創始者であるフレーベルは、市販されている完成された玩具を否定し、単純で基本的な形体の遊具を開発した。そして、幼児が自らの内部に持つ「神性」を直観するようになるための遊具という考えから、神からの賜りものという意味でそれらを「Gaben」 (=Gifts) と名付けたのである。本来は、球や立方体などの、既に形体を持っている遊具を「Gaben」と言い、折り紙や粘土などの、形を作るための素材は「Beschäftigung=occupations」と呼ばれたのであるが、フレーベルの教育法が日本に伝わった際には、一括して「恩物 (Gabenの訳)」とされた。その二十恩物の十八番目に「Falten (折り紙)」がある。フレーベルの教育法において折り紙は、幾何学的な考えが直観できるものとして取り入れられたのである。フレーベルの折り紙は基本形を作ることから始まる。正方形の4隅を中央に集めて「座布団折り」をし、裏返してもう一度座布団折りをすることで最初の基本形が完成する。この基本形より折り筋を活かして次々に連続的にたたみ替えていくことで、多彩な折り紙が展開していくのである。フレーベルの折り紙は2種に分けられる。一つは「営生式」 (lebens-formen) で、生活の中で身の回りに見られる物品や動植物などの形を具象的に作るものであり、他は抽象的な「摘美式」 (schonheitsfor-men) で、模様などを美しく作るものである。

「はじめに」で書いた様に、明治初期の幼稚園の保育内容は、フレーベルの教育原理の影響を強く受け、恩物の操作が主な内容であった。折り紙は「摺紙 (しょうし・セフシ)」または「畳み紙 (たたみがみ)」とも称された。それまであった礼法折り紙の「折形」や遊戯折り紙の「折据 (おりすえ)」、あるいは江戸末から明治にかけての「折りもの」の呼称を採用せず、わざわざ「摺紙」または「畳み紙」と名付けたのは、日本の伝統との区別であったと考えられる。しかし、実際に折っていたものは、フレーベルの折り紙に加えて日本伝承の鶴や熨斗包みとなっていたのである。熨斗等の礼法折り紙は、具象的な「見立て」に依らないという意味では「摘美式」とも言えるが、所謂「ぐらい折り」を多用するという特徴から見ると、幾何学的なフレーベル式とは対極をなすものと言わざるを得ないものである。恐らく当時の保姆たちにとっては、他の恩物と違い、折り紙については既知であるとの自負があり、フレーベルの宗教的な思想性や幾何学との密接な関係は捨象されていったものと考えられる。

(2) 戦後の折り紙教育における教育的価値と指導法

大森 (2011) は、現代の折り紙教育の礎を築いた保育者、教育者たちの折り紙の教育的価値と指導法についての見解を集約している。大森が、副島ハマ、待井和江、仲田安津子、川並知子の4氏の著書より、教育的価値について示した要素を抽出した結果、その共通する要素は、指先の巧緻性を養う、図形の認識力、美的情操性、集中力、創造性を培うであった。なお、指導法に関しては先の4氏のうち、監修の待井和江氏から実践者である岡村康裕氏に代えている。4氏の指導法についての共通点としては、折り紙は我が国に古くから伝わる伝承遊び、文化であり、大人が子どもに正確に伝え、教えていく必要があるとの認識があるとしている。また、それだけではなく、創造性を育てることも折り紙の教育的

価値であり、発達段階に合わせた指導法の開拓と同時に、折り紙が子どもにとって創造的であり、自由で楽しい活動になるよう最大限に工夫を試みているとしている。大森は、指導の前提として、実践する保育者自身が折り紙の価値として想像性、創造性、自由性を正確に認識することで、指導法が構築されとしている。保育者が、興味を持ち習熟すること、折り紙の教育的価値を認識して子どもの育ちに位置づけ、教材研究を行うことが重要なのであり、指導の前には子どもが興味を持つ工夫をし、他の遊びと関連付けたり、生活に生かすこと等も提示している。

（３）東洋、阿部恒の提唱する教育的価値と指導法

心理学者で東京大学名誉教授の東洋（2004）は、折り紙は幼児の精神発達に寄与するものであるとしている。30年以上に渡り子どもの折り紙指導に携わってきた阿部恒は、東の監修の下、『母と子の会話 ことばは折り紙』を著している。阿部はこの書を、いわゆる一般的な折り紙教本ではなく、自然な形で親子のコミュニケーションを楽しむための手引書であるとして、具体的な言葉による折り紙の伝達方法を提案している。その中で東は、幼児期の精神発達にとって大切な条件として、想像、ことば、安心、技能、意欲の5つを挙げ、それを伸ばすような親子（大人と子ども）のかかわり合いを助ける媒体としての折り紙を推奨している。東によれば、想像力の育つ幼児期には、想像力に形を与える媒体が必要である。その媒体として、折り紙を始めとする様々な表現活動が重要なのである。表現活動には、自由度の高い表現活動と模倣による表現活動があるが、それらはどちらも重要であり、折り紙はどちらも兼ね備えている。幼児は模倣によって形に合わせようとする中で、自分の表現を適切にコントロールすることを学ぶのである。折り紙は、模倣による活動ではあるが、完成形は想像を働かせて「見立て」をすることが必要であり、想像は創造へとつながっていくのである。

東はさらに、技能を伸ばすための幼児への教え方、援助方法についても4項目に分けて述べている。1つ目は、やってみせて意欲を引き出すことであり、それでも興味を示さない場合は、無理にやらせない。2つ目は、簡単な所から段階をふまえ、確認しながら進めることである。おおげさに褒める必要はなく、認める程度で良い。3つ目は、見せるだけでなく、必ず言語化することである。それが思考の発達に望ましい影響を与える。4つ目は、達成感を味わえるようにすることである。大人は褒めるよりも作品を飾ったり、一緒に遊ぶことが効果的である。また、その他に一般的に、丁寧に、楽しい気持ちで、根気強く教えることが必要であるとも述べている。

阿部は、それをさらに具体化し、幼児がすぐに折れなくとも、考える時間を大切にすることや、間違えた場合でも否定的な言葉よりも合っているかを確かめるような質問や補足説明を加え、子ども自身の判断でやり直すことが大切であるとしている。そして、各作品の折り図にどのような言葉を添えるかの例を多数挙げているが、それらは明確であるとともに「片方のドアを開けましょう」といったように、制作途中にも見立てを多用しているものである。そこに、一つひとつの工程も大切に、子どもと共に楽しむ姿勢がうかがわれる。

（４）保育者養成における折り紙指導

田中（1991）らは、保育者養成課程において学生に体系的に折り紙指導をすることを提唱している。田中は調査により、保育者にはより多くの折り紙を折れるようになりたいとの願望があるとし、保育者に折り紙を体系的に指導することによって、効率的に多数の折り紙を折ることが可能になるとしている。そして、学生時代に保育者養成校で体系的に折り紙の指導を受けることで、実際に保育者となった際に幼児に自信をもって指導することができ、望ましい保育の場での折り紙指導の確立もできるとして

いるのである。田中は、養成校の限られた授業時間数の中で学生が主体的に楽しく、偏らずに基礎・基本の折り方の法則性を学び、理解させる指導方法として、伝承折り紙を系統的に分類し、易しいものから難しいものへと体系化した「循環基本形」を考案している。

（５）考察

フレーベルが保育内容として折り紙を取り入れたのは、幾何学的直観を養うためであった。今日では、折り紙を通して育つものとして、指先の巧緻性、図形の認識力、美的情操性、集中力、創造性等、それ以外の教育的価値も多数見出されている。中でも創造性については、折り紙は模倣性の強い活動であるため、創造性に乏しいとする考えはなくなってきていると言って良い。また、誰かと共に折ることで、コミュニケーションの媒体となることや、遊びとして達成感や満足感、情緒の安定を図る意義もある。

保育者養成課程において折り紙指導が必要であるとすれば、その理由のひとつは、遊びとしての折り紙の魅力を体験的に知り、教育的な意義についての理解を深めることであろう。また、折り紙の法則性を知ることによってその構造を把握し、折れる作品のレパートリーを増やすことも考えられる。さらには、自らの指導技術を磨くと共に、幼児への指導法を会得することについても検討する必要があるのではないだろうか。

現在、折り紙の折り手順を示した著作物は多数存在するが、その中で大人の子どもへの折り紙の指導方法について、具体的に述べられたものは数少ない。それは、折り紙は折り図や他者が折る所を「見て折るもの」という意識の現れではないかと考えられる。そのことが、保育者の子どもへの折り紙の指導法について学ぶ必要性を不要なものとしてしているのではないだろうか。しかし、東・阿部らが主張するように、幼児にとっては折り紙を折ることそのものに加えて、どのように教わって折るのが重要なのである。そこでは、折って見せるだけでなく、情緒的なつながりを意識しながら、明確なわかりやすい言葉を添えていくことが大切である。それは1通りに決まったものではなく、目の前の幼児に合わせたものでなくてはならないのであるが、指導法がほぼ各保育者の試行錯誤的な取り組みに委ねられている現状から、それを情報交換し検討し合えるような機会を持つことも有効であると考ええる。

3 学生アンケート調査より

（１）調査方法

- ① 対象者：本学幼児教育学科2年生128人（117人回答）
- ② 学生の実習の概要：本学幼児教育学科では、入学生のはほぼ全員が幼稚園教員2種免許および保育士資格の取得を希望している。1年次の前・後期1週間ずつ、全員が隣接する新潟青陵幼稚園での教育実習を実施しているが、そこでの経験および2年次の8～9月に実施している、保育士資格取得のための保育所を除く社会福祉施設での実習経験は調査内容には含まないものとする。調査の対象となる実習は、概ね1年次の2～3月に実施する保育所保育実習（2週間）、2年次の6月に実施する幼稚園教育実習（2週間）、2年次の10月に実施する保育所保育実習（2週間）である。ただし、2年次の保育実習は保育所またはその他の社会福祉施設を選択制であり、対象学年では3名がその他の社会福祉施設選択であった。つまり、大多数の学生は、保育所実習を選択している。
- ③ 調査時期：学生が、幼稚園教員免許・保育士資格取得のために必要な実習を全て終えた12月に実施した。

(2) 調査内容と結果

- ① 実習で子どもが折り紙をしている場面を見ましたか。見たのはどの実習の時ですか（複数回答可）
はい…111人（95%）
1年次保育所…84人（72%）、2年次保育所…67人（57%）、2年次幼稚園…78人（67%）
いいえ…6人（5%）
- ② ①で「はい」と答えた人は、どのように折っていましたか（複数回答可）
ア. 自由遊びの時間に、自分で本などを見て…90人（81%）
イ. 自由遊びの時間に、保育者や友達から教えてもらって…74人（67%）
ウ. 一斉（クラス）活動で保育者（または実習生）が指導して…59人（53%）
エ. その他…6人（5%）
・本などは見ずに知っているものを折っていた（3人）
・延長保育の時間に折っていた（3人、ただし延長保育時を自由遊びに含めた学生もいた）
- ③ 園にある折り紙を子どもはどのように使っていましたか
ア. 保育者が出した時に使う…49人（44%）
イ. 子どもが自由に取って使う…50人（45%）
ウ. 使いたい時に保育者に断って使う…50人（45%）
エ. その他…3人（3%）
・子どもが自分で取るが、1日に使える枚数が決められていた（3人）
- ④ 実習で子どもに折り紙を教える経験をしましたか。したのはどの実習の時ですか
はい…68人（58%）
1年次保育所…36人（53%）、2年次保育所…34人（50%）、2年次幼稚園…35人（51%）
いいえ…49人（42%）
- ⑤ ④で「はい」と答えた人は、どのような時に教えましたか（複数回答可）
ア. 自由遊びの時間…50人（74%）
イ. 部分実習…20人（29%）
ウ. その他…12人（18%）

年齢（歳児）	作 品 名
2	梨
3	ふわふわ飛行機、舟、すべり台、バッタ、カブトムシ、魚、鳥、かえる、栗（2）、どんぐり、おひなさま、さくら、ハート、カップケーキ
3・4	手裏剣（2）、舟、カブトムシ、エビ、カニ、栗
4	コマ、紙飛行機（4）、舟、バナナ、カブトムシ、セミ、トトロ、どんぐり（2）、さくら、バレエシューズ、リボン、ペンダント、皿、かぎ、ハート（2）、コットン・コン、七夕飾り（じゃばら折り）
4・5	車、舟、花、ハート
5	バクバク（2）、手裏剣（2）、やっこさん、カメラ（2）、紙飛行機（2）、羽ばたくとり、願い事鶴、くるくるちょう（2）、あやめ（2）、バラ、おたまじゃくし、カタツムリ、傘、七夕飾り（ちょうちん）、織姫・彦星、立体の星、かき氷、さかな、ペンギン、タコ、クラゲ、金魚、カブトムシ、セミ、コウモリ、どんぐり、くんしょう、キャンディー、きつね、きょうりゅう（3）、せんす、いす、ジパニャン・ウィスパー、くまのがっこうのジャッキー
3～5	ハートの指輪、かばん、風車、カメラ、花、手裏剣

- ・保育者による一斉活動の補助（9人）
 - ・延長保育の時間（3人、ただし延長保育時を自由遊びに含めた学生もいた）
- ⑥ ④で「はい」と答えた人は、対象年齢と作品名、教えてみて難しかったことや感想などを書いて下さい（自由記述）

難しかったこと

- ・どのように伝えたら良いか、分かりやすい言葉が見つからなかった（24人）
- ・子どもの教えて欲しいと持ってきた折り図を、自分自身が理解することが難しかった（9人）
- ・多人数指導の際、理解や技術に差があり、早くできている子への配慮が課題となった（7人）
- ・自由遊びの際、一人に教えると次々に子どもがやって来て、教えるのが大変だった（3人）
- ・教えた作品の難易度が子どもの年齢、理解度に合っていなかった（4人）
- ・子どもが自分に合わない難易度の作品を教えて欲しいと言ってきて、教えても折れなかった（2人）
- ・前に保育者が教えた手順と違ったため、子どもが戸惑った（しかし、自分の教え方のほうが分かりやすく、最終的には全員折ることができた）
- ・園で広告紙を使っていたが、裏表が分からないため折り難く、色彩の美しさも味わえなかった
- ・折ってある作品を戻して使い、説明したが、線が多く子どもが混乱してしまった
- ・顔と体が別の作品は子どもがイメージし難いようだった
- ・完成途中の折り紙を子どもが別の物に見立てて遊び始めてしまった。楽しそうだったのでそのままにしたが、それで良かったのだろうか

その他感想

- ・子どもが教えて欲しいと言って大人と一緒に折るのは、作品を作りたい時だけでなく、コミュニケーションを求めている場合もあると思った（2人）
- ・折って見せることと言葉で説明することはどちらも大切であると感じた（2人）
- ・1つひとつの段階を丁寧に伝えることが大切であると感じた（2人）
- ・指で示しながら、ゆっくり伝えていかないと幼児には理解しづらいと感じた
- ・実習前に季節の折り紙の折り方を身に付けて行っていたが、伝承折り紙が折れず、練習していけば良かった
- ・一度教えただけで折れるようになり、その後は自分で折っていて幼児の能力の高さを感じた
- ・簡単にできて遊べるものは、教えるとすぐに覚えてたくさん作っていた
- ・子どもが友達に教える時に、私（実習生）の言葉を真似して教えていた
- ・一緒に折りながら、できるにつれて嬉しそうな表情になっていくのが印象的だった
- ・折ったものからどんどんイメージを発展させていくのがすごいと思った
- ・指導の際、大きな用紙を使い、折り線をペンで書けばもっと分かりやすかったと思った
- ・一斉指導の際、幼児同士で教え合うように促したら効果的だった

（3）結果についての考察

アンケート結果から、やはり保育の場に折り紙が取り入れられている頻度は多いことが分かる。いずれかの実習で子どもが折り紙をしている場面を見たと答えた学生は9割以上に上った。どの実習の時に見たのかという問いに対して、全ての実習で見たと答えた学生は3分の1にあたる41人であった。見な

かったと答えた6人のうち2人の回答には、「実習ではないが、ボランティアとして保育園に行った際に見た」「児童養護施設での実習時に見た」と補足されていた。

どのような場面でどのように折られているかに関しては、自由遊びに取り入れられていたとの回答が最も多く、折り図を見て子どもが一人で折る、が8割以上、保育者や友達から教えてもらいながら折る、が7割近くであった。子どもが一人で折っていても、分からない所、上手く出来ない所は保育者や実習生に援助を求めていると考えられる。実習期間中に保育者がクラスへの一斉指導をしている場面を見た学生も半数に上った。このことから、学生の保育技術としての折り紙の技能修得の必要性を感じる。

物質的な環境設定として、子どもが折り紙用紙を得る方法は、保育者が用意する、設置場所から自由に取り、保育者に申し出てもらう、のどれもが同数程度であることが分かった。折り紙は安価で手に入れ易い教材であり、毎日でも子どもに与えることが可能な教材と言えるであろう。使える枚数の指定がある場合はあっても、それは子どもに紙1枚も大切に使うことを知らせるためなのではないだろうか。

実習中に自身が子どもに折り紙指導をする経験があったかについては、全体の半数以上の学生があったと答えている。どのような場面で指導したかは、多い順に自由遊び時、部分実習時、その他として保育者の一斉指導の補助であった。教える対象としては5歳児が最も多く、指導した作品はどの年齢でも、遊べるもの、食べ物、生物、身につけるもの、季節や行事に関するもの等であった。子どもから教えるよう求められた以外に、学生が教える作品をどのように選定したかについては今後の研究課題である。恐らく子どもの発達と興味・関心を踏まえたものと考えられるが、それには適した作品にどのようなものがあるかという教材研究も重要である。

自由記述からは、指導方法について難しさを感じた学生が最も多く、具体的には「『少し』などの加減がどのくらいかを伝えること」や「年齢に合わせて分かりやすく教えること」が難しかったという声があった他、「『こうやって、こう』としか言えなかった」と自身のボキャブラリーの不足を自覚したという声もあった。また、学生自身の折り図の理解や折り紙を折る力の不足が上がっていた。以上のことから、学生が折り図を見て折るという経験を増やすと同時に、幼児への指導の際にはどのように伝えるのが効果的かについて、実習前や実習後に考え、学生同士で学びあうような機会を持つことも有効であると考えられる。

感想にあった「子どもが教えて欲しいと言って大人と一緒に折るのは、作品を作りたい時だけでなく、コミュニケーションを求めている場合もあると思った」という学生の意見は、示唆に富んでいる。周知の通り、遊びは子どもの情緒の安定を図り、様々な心身の諸機能の発達を促す活動である。遊びが遊びであるためには、子どもが「面白い、やってみたい」と感じながら自発的、主体的に活動することが必要である。折り紙も単に作品が完成すれば良いというものではない。したがって、大人が教える際に強制的になり、楽しさを失っては、子どもは抵抗感をもち、「またやってみよう」という意欲は低下するであろう。共に折る過程を楽しみ、教える人との情緒的な関係を持つことも、指導の際大切にされるべき事項であると言えるのではないだろうか。

4 総合考察

大人が自分で折り紙を折ることと幼児に指導することは、全く別のものであると言っても過言ではない。無論自身が作品を折ることなしに指導することはできないが、幼児への指導は作品を完成させることのみが目的ではないのである。一緒に楽しみながら何かを作り上げる喜びを味わえるようにすること

も大切である。

また、保育者は作品の完成に向けた手順をただ教えるのではなく、「折り方」を指導しなければならない。初めの正方形用紙を例えば対角線で三角形に折ることも、ただ三角に折るよう言ったりやってみせたりするだけでは、幼児ではぴったり重ならずにずれた三角形ができることも多いであろう。折り初めからずれていたのでは、その後完成に近づけることが難しくなってしまうと考えられる。自分のイメージする形にならないことが、「できない」「つまらない」といったように意欲を失うことにつながってしまう恐れがある。三角形に折るのであれば、まず、1つの角が自分の手前にくるように置き、手前の角を向こうの角にずれないように合わせ、それを片手で押さえながら、その下に手を左右に丁寧にすべらせ折り筋をつけることで、ずれない三角形ができるのである。そのように1つの工程を丁寧に指導することで、幼児は「折り方」を身に付けていくことができるのである。しかし、その際幼児にとって分かり難い表現を使ったり、強制感を持つような言葉が多くなってしまうと、遊びとしての楽しさが失われてしまう。1つひとつの工程の折り方のポイントを押さえながら折って見せると共に、幼児がイメージしやすい言葉を添えて楽しく指導することが必要である。そのためには完成形だけでなく、折り途中の形に見立てを使うことも有効である。3歳児であれば、「お山とお山がこんにちは」や「アイロンをしっかりとかけて」といった言葉も考えられる。授業でやったそうした言葉を実践してみても、「家でアイロン掛けを見た経験がないようで上手く伝わらず、擬音を使って『ピーッと折ってね』と言ってみたら伝わった」と報告した学生もいた。それぞれの幼児に合わせて言葉を選ぶことが指導者の工夫であり、役割であろう。ある経験豊富な保育者は、作品を折る途中の形を「家」に見立てた。その際、裏表を間違え、屋根部分に裏の白い面が出てしまった幼児に対して、「あれ？この家は屋根に雪が積もって白くなっているぞ」と声を掛けた。違っていることに気づかせるのも、このようにユーモアを交えてできると楽しいものになる。

保育者となる学生が身に付けるべきことは、折り紙の技能そのものに加え、それぞれの幼児に合わせた指導法を工夫していける力であると考えられる。そのためには養成校における指導において、折り紙の教育的意義をふまえながら、学生が自身の経験により楽しさの所在を知り、幼児に適した作品選びや指導法について相互に学びを深めることが望まれる。

参考文献

- 1) 岡村昌夫 (1995) 古典研究—明治時代の折り紙事情. 季刊をるNo9.No10. 双樹舎
- 2) 岡村昌夫、アン・ヘリング他 (1999) 折るころ. 龍野市立歴史文化資料館
- 3) 福井晴子 (2003) 折り紙遊びの歴史的側面と幼児教育における歴史的意味. 保育学研究 (41)
- 4) 五十嵐裕子 (2012) 折り紙の歴史と保育教材としての折り紙に関する一考察. 浦和大学・浦和大学短期大学部紀要 (46)
- 5) 大森隆子 (2010) 遊戯折り紙研究考 (2) —遊戯折り紙の教育的価値について—. 相山女学園大学教育学部紀要 (3)
- 6) 大森隆子 (2011) 遊戯折り紙研究考 (3) —遊戯折り紙の指導法について—. 相山女学園大学教育学部紀要 (4)
- 7) 大森隆子 (2012) 遊戯折り紙研究考 (4) —わが国幼稚園創設期の折り紙教育について—. 相山女学園大学教育学部紀要 (5)

- 8) 田中陽子、後藤千鶴子 (1988) 保育者養成における折り紙指導の体系化 (Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)(Ⅴ)(Ⅷ)(Ⅸ). 日本保育学会大会研究論文集 (41) (42) (43) (44) (47) (50)
- 9) 吉田愛子 (2007) 保育教材としての伝承遊び「折り紙」について. 岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要 (39)
- 10) 東洋 (監修)、阿部恒 (2004) 母と子の会話 ことばは折り紙. 日本評論社